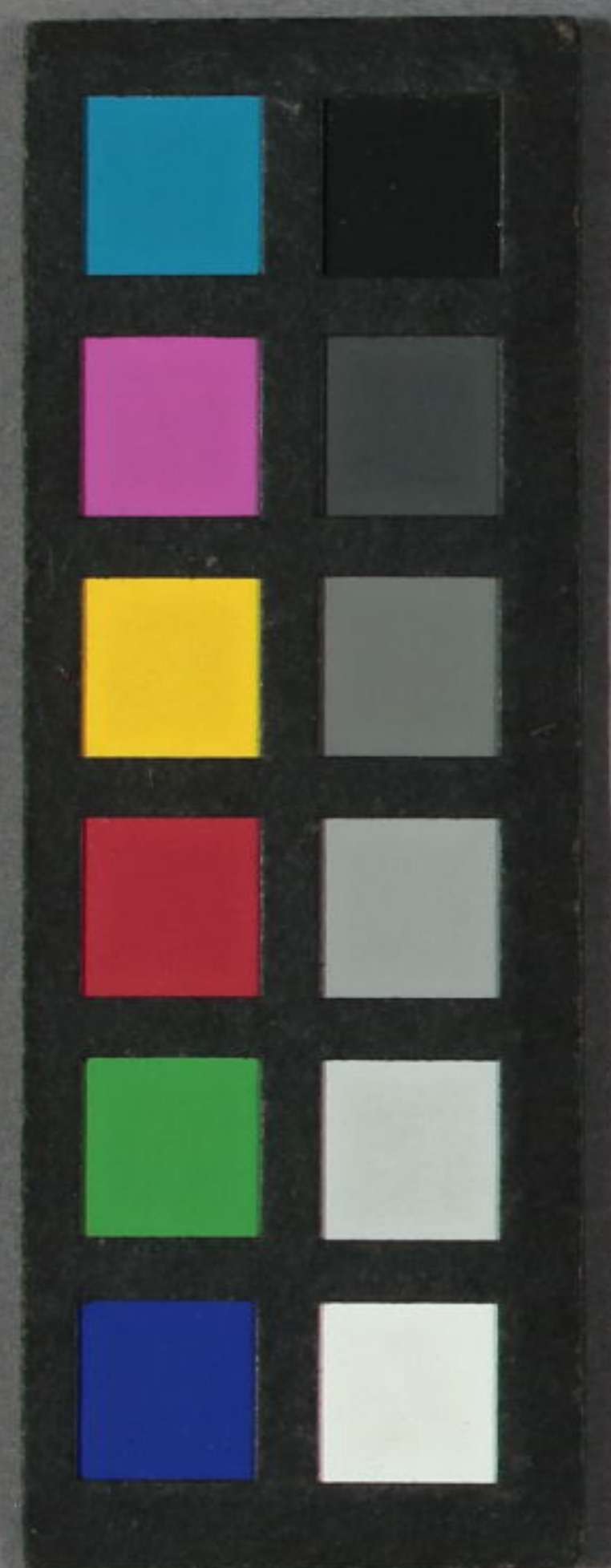
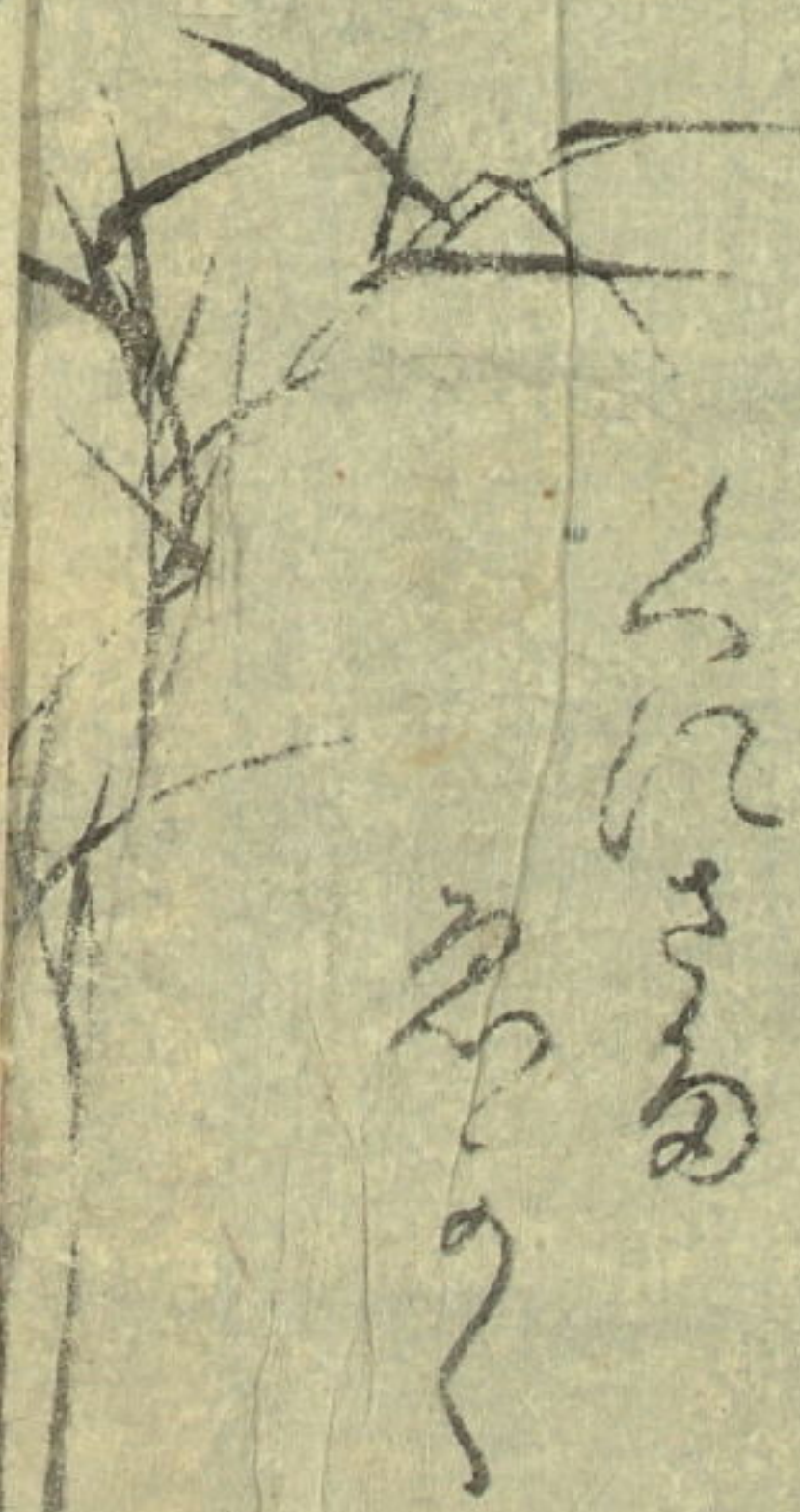




松島
松島

^ 13
3162
6





也志之

卷十一

うゑ
れ
ち
き

たのしみ

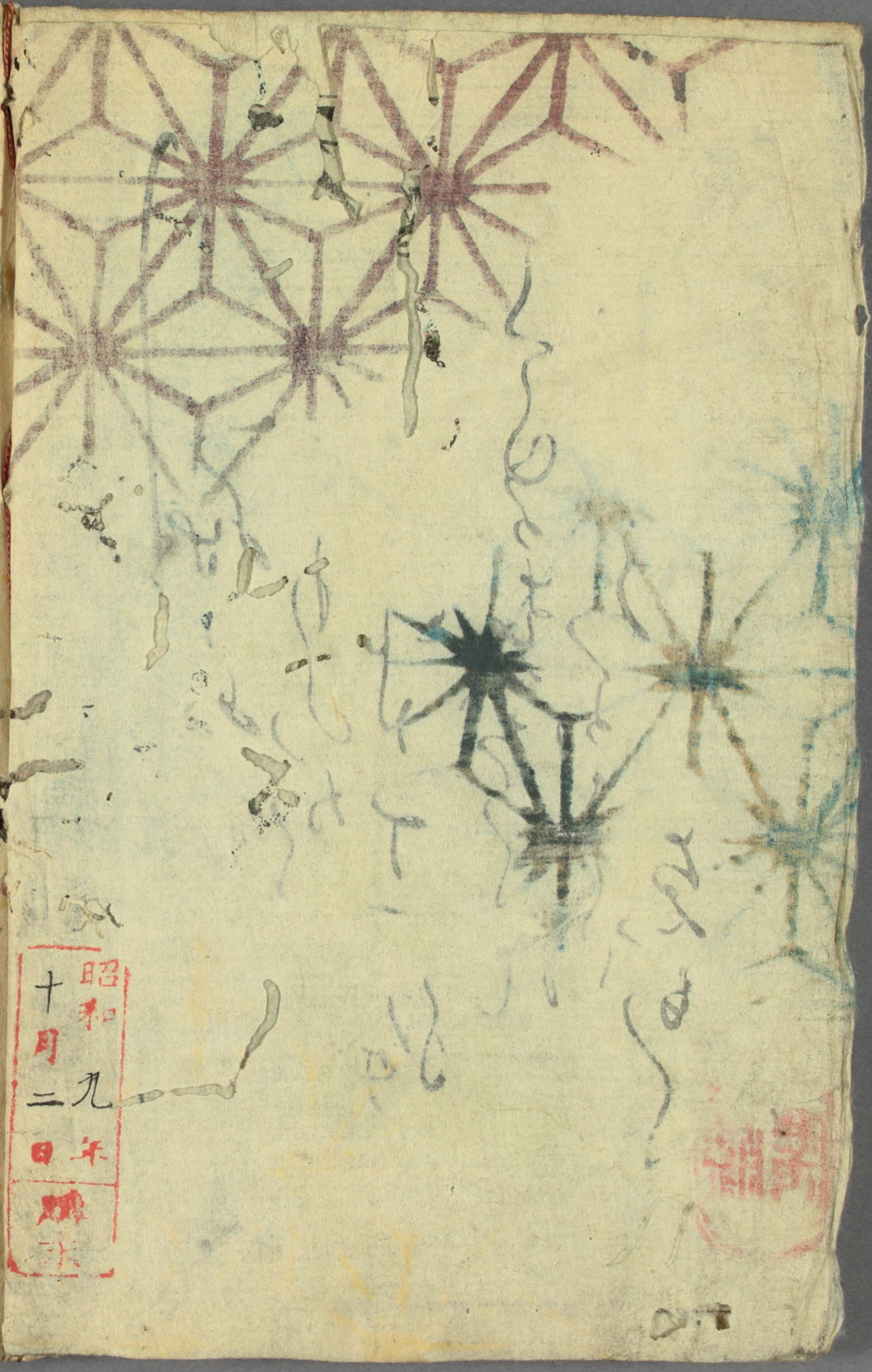
くねさめ

卷之四



卷之





昭和九年
十月二日
刊

門へ 13
3162

ふね

才十一

たのしみ

くら

松林堂製



楊寶の王孫と與正直翁の葛籠を送る倭漢影の髯雀が
九死を免る一生を保つ其の續醫院の諸君金銀銅
銀人腹者韭菜熟而不斷咽之不過二次從穀道出といふと外ふ
今一箇或人昔談として予小告一雀の奇事を種とせられバ

序文のみ 僅轉舌切雀御宅ハ何所ニ在とも看官の佳童
連此編の發販あつハ必近邊の裨史舖ハ賈得御覽を
冀と言ふ則裨官中ふすゞ黄口の雀ある

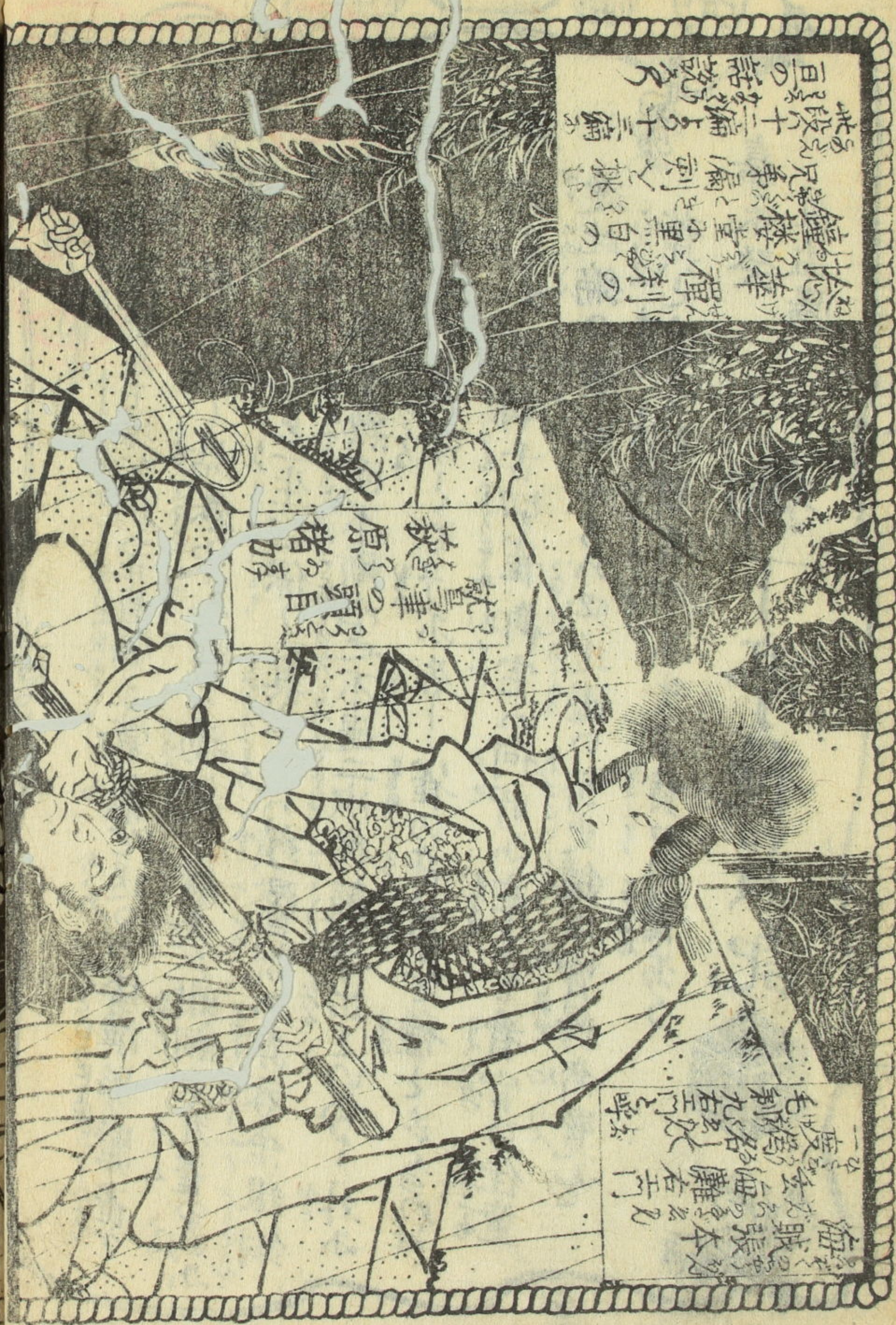
嘉永癸丑孟陽

柳下亭種員記

あつた人十一



世段十二編より十三編
 巨の話を
 鐘樓堂の黒白の
 禪利の
 兄弟と漏れと挑む



海賊張本
 度々名義
 毛利九右門と呼ぶ

就皇津の頭目
 故原猪か



格助の兄松平の
 鐘樓守頼念

元禄元年申歲次龍集
 光珠山松平禪寺
 元五世現住栄快

大いふく

卷之五

七

新



卷之八

いふまぐらたれ

五

三ノ宮

10



とれろ

七
八

れづのふ又

五十六

おとこ

海のほとり

元弘元年

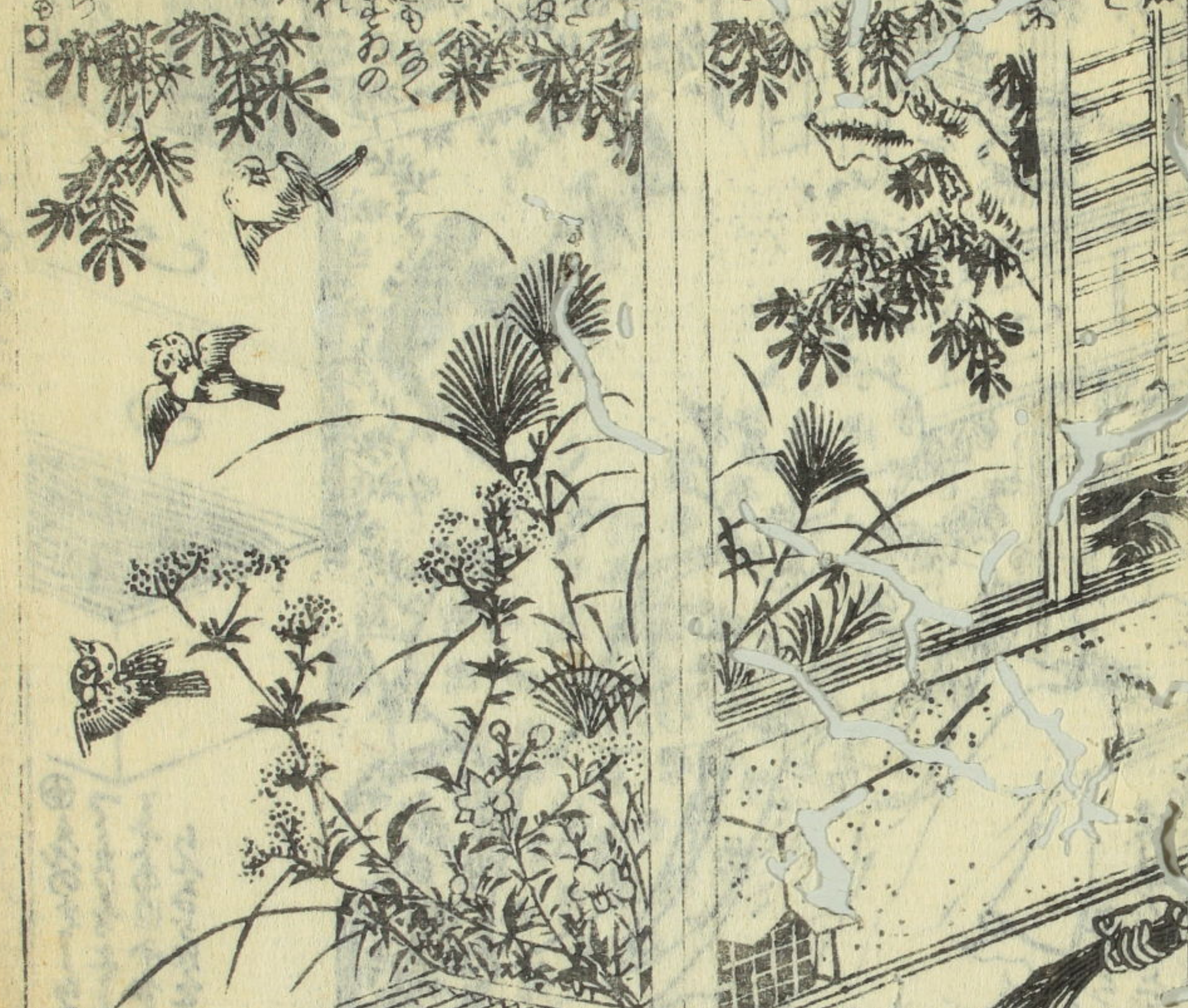
とく

27

たふ

卷之八

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

A black and white illustration of a woman in a kimono lying on the floor in a room. The woman is positioned in the lower right, looking upwards with a distressed expression. She wears a kimono with a dark, repeating floral or cloud pattern. To her left is a wooden cabinet or chest of drawers with a curved handle. The wall behind her is covered in wallpaper with a dense, repeating leaf or vine pattern. To the right, a wooden sliding door (shoji) is partially open, revealing a glimpse of the outside world. The floor is a plain, light-colored surface. The overall style is characteristic of traditional Japanese woodblock prints.

[illegible]

ころはうゝ
 ぬきちうえ
 そのたのむちの
 元をいひよまきあう
 はせしうのれやと
 りちのあふりうてぐ
 えさふまめのたのむ
 けられておをせうひ
 うるいのちをま
 ちのふとま
 す、ゆじてのあ
 ぐあふちのまう
 れちかりと

[illegible]



種員作國貞西

此人物の註解ハ
次の巻中に見る

假名讀ハ大士傳

自初編
至二七編

元治紀元甲子之春
 文溪堂の初編より
 煥然の分再板し
 出板い
 元治紀元甲子之春

種員作
貞画

結

乃

再板

柳下

文庫

十一編下





種員作

國貞畫

白

縫

譚

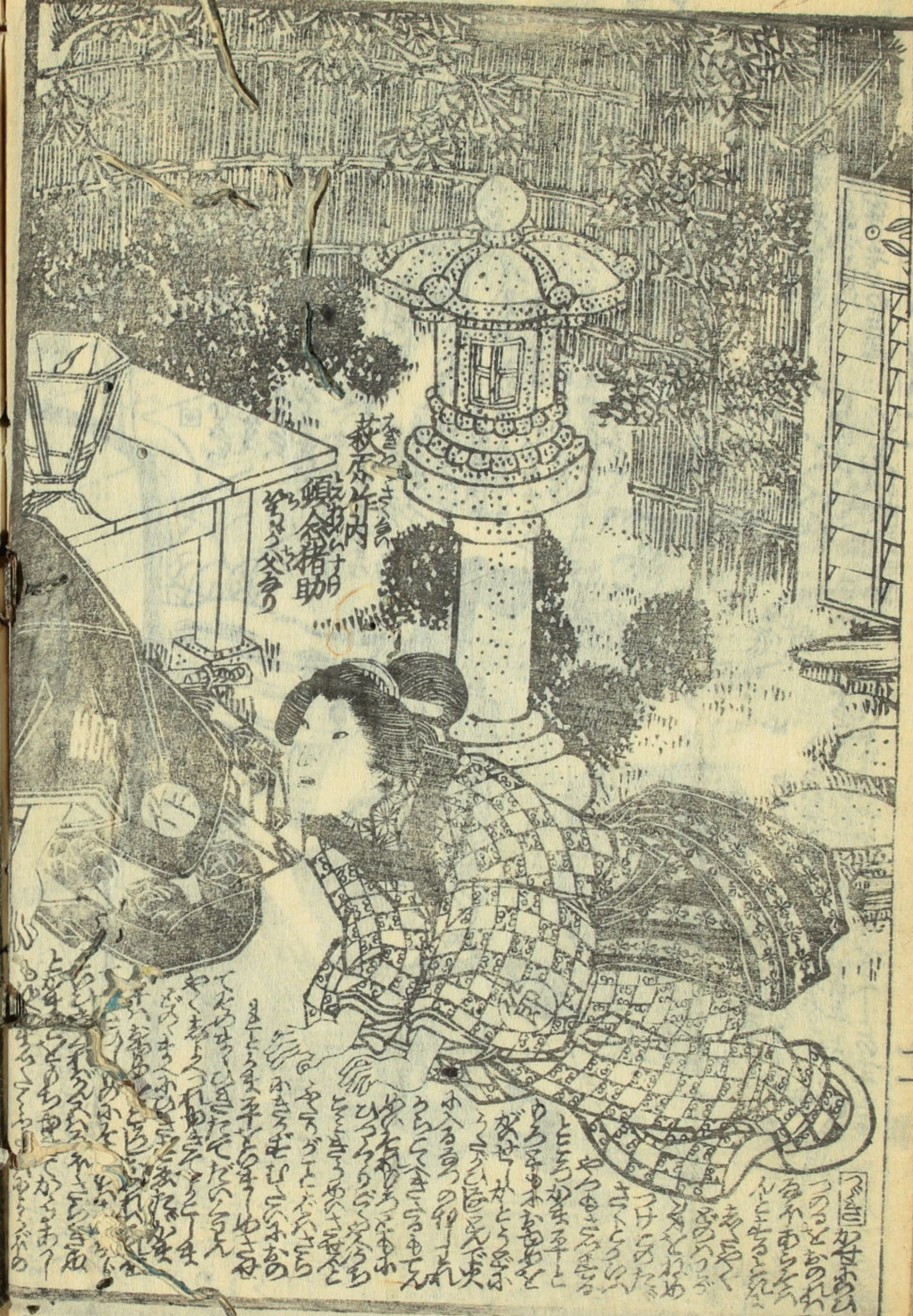
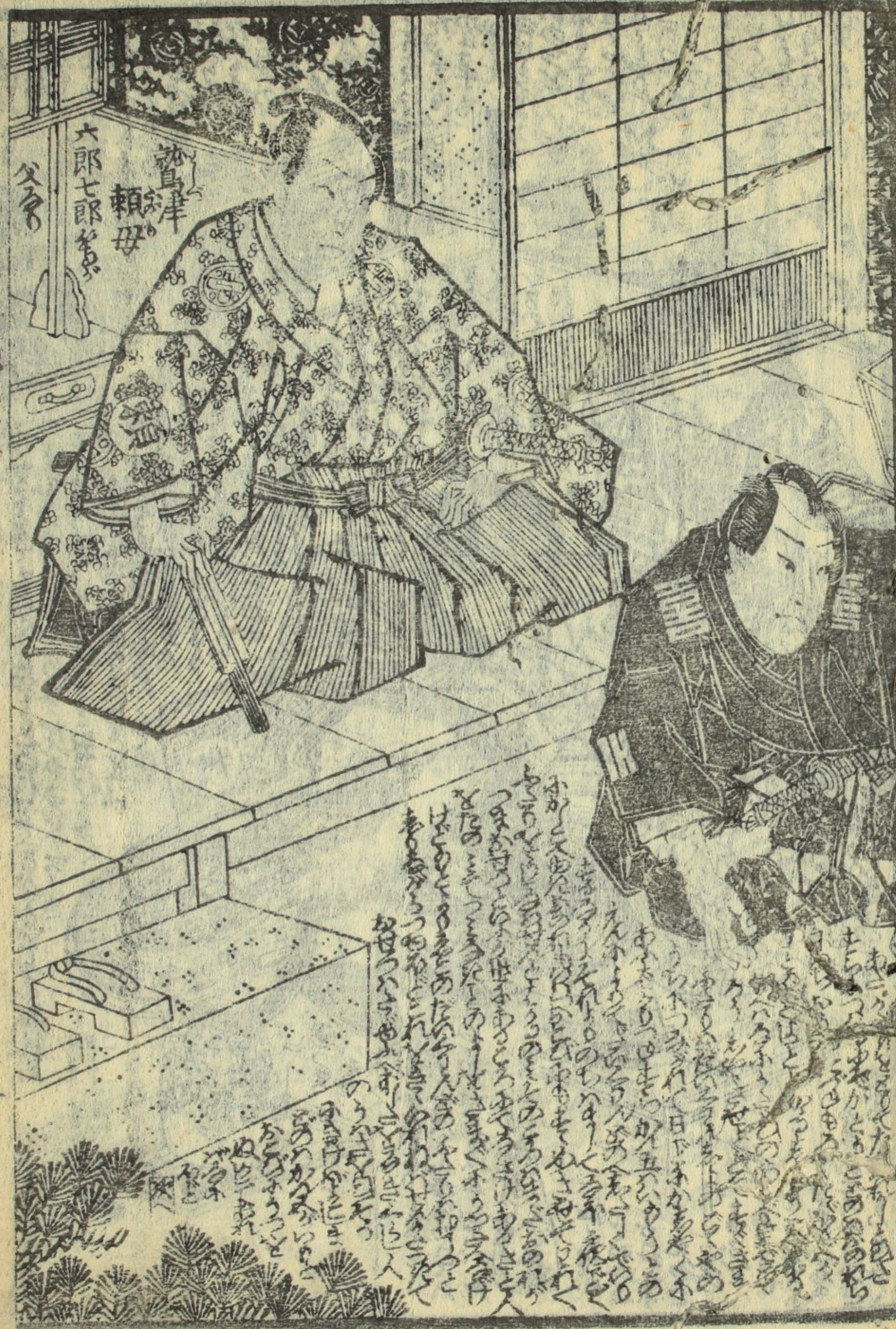
編

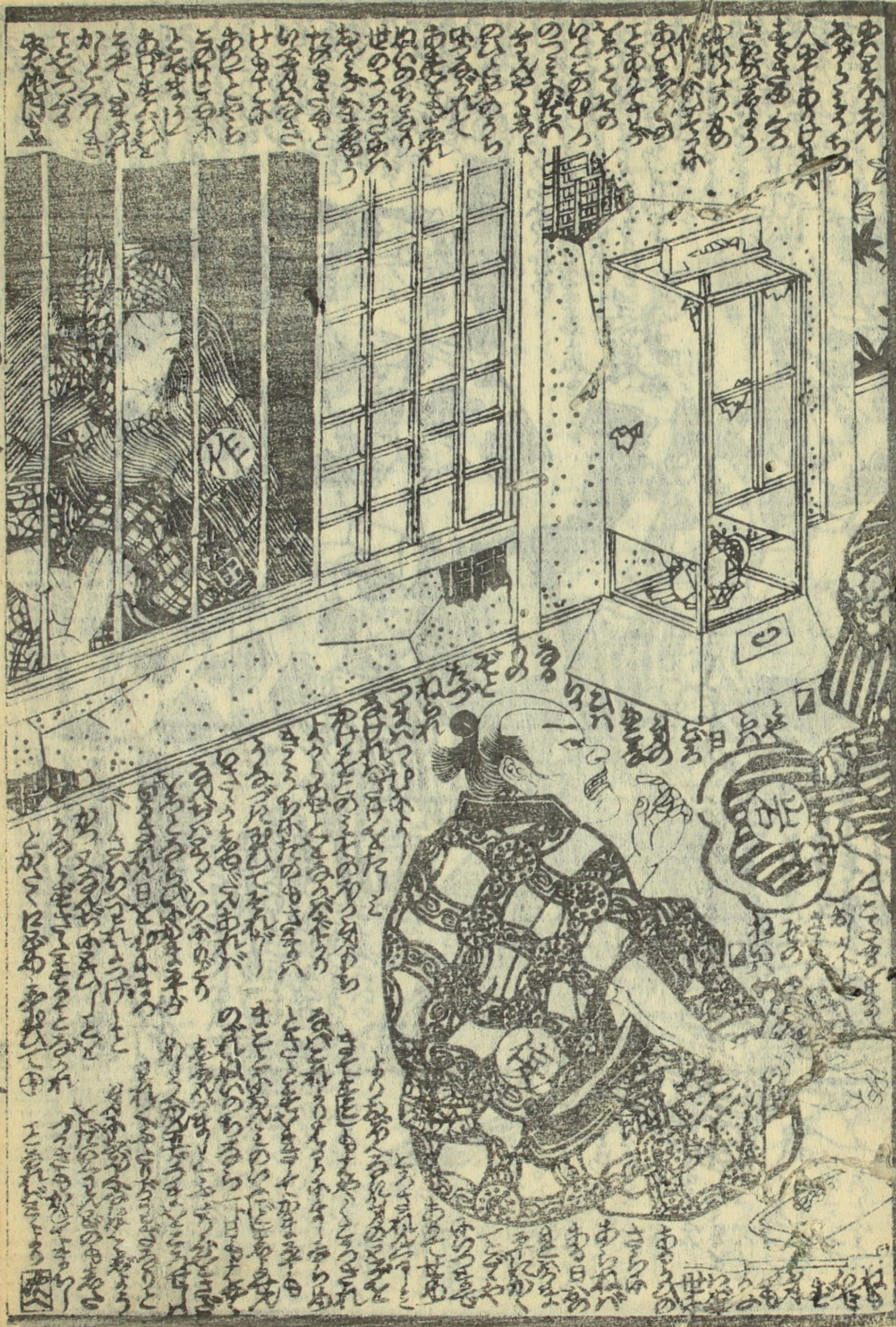
十

冊

下

蘭慶







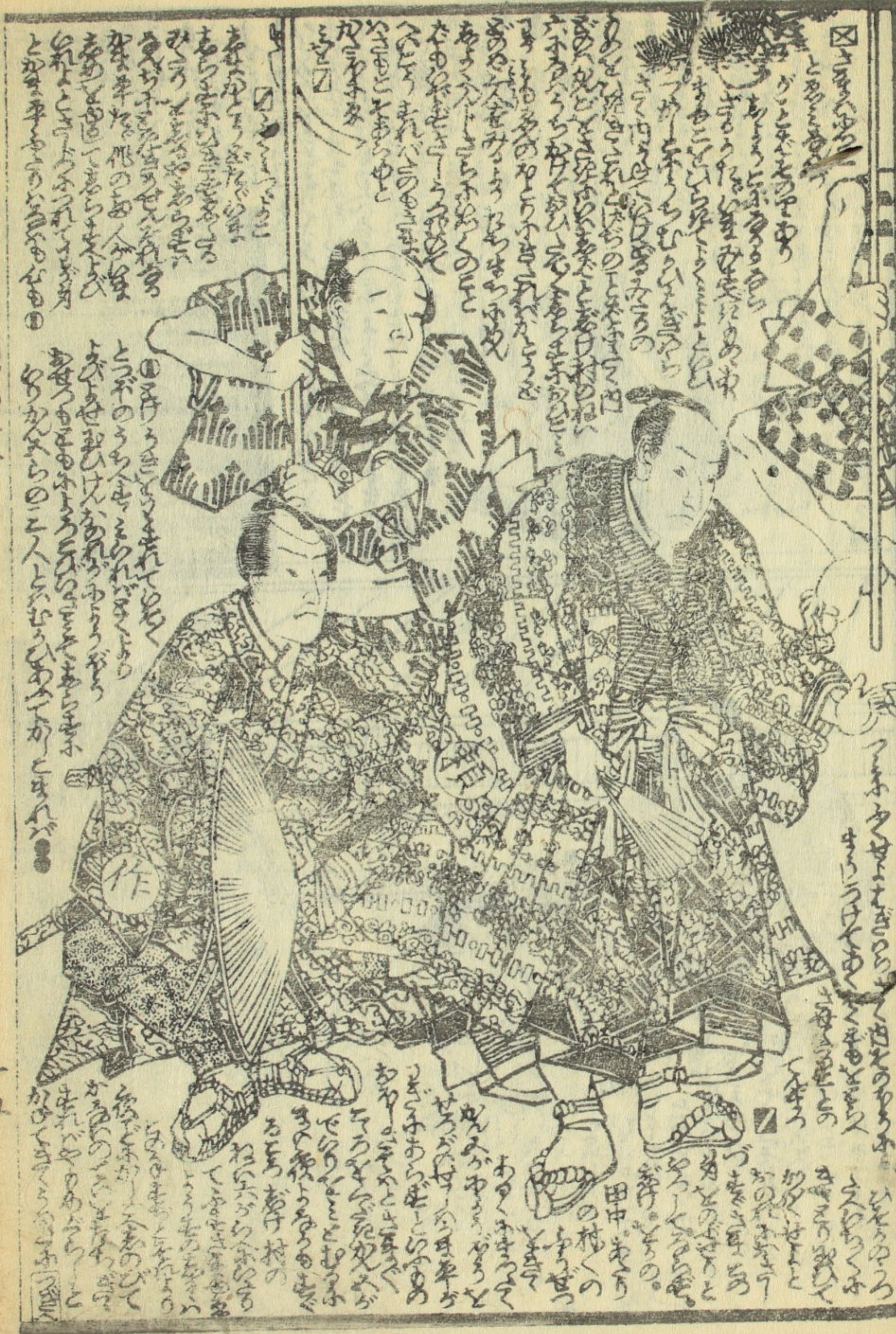


田中

唯

車

田中



田中

唯

車

田中



さきやうにいふやうなうたが
てふやうなうたが
よりきつたうたが
ねどめいさうなうたが

あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが

あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが

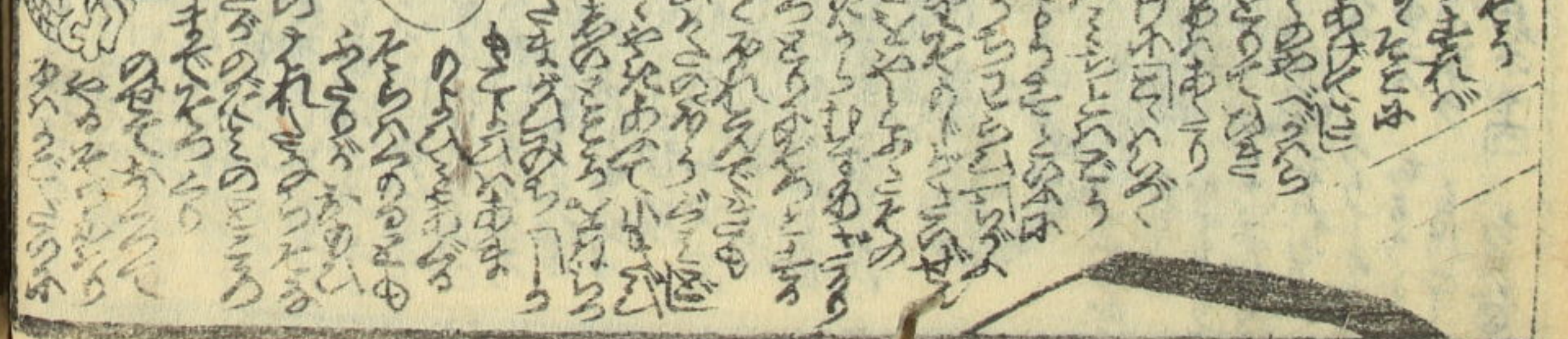


さきやうにいふやうなうたが
てふやうなうたが
よりきつたうたが
ねどめいさうなうたが

あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが

あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが
あつたうたが

卷之五



◆いまだとあれど
 わたしをきくやうな
 とあらまゝにふんて
 捨てつくわすり
 まじあはれなのも
 うちのふひこそを
 なつかりかきけり
 平賀又せんまたゆ
 るまじりらら

[illegible]

[illegible]

つかへたれど
 ちとせじろや
 やうやうな
 ひつうな
 とひつうな
 きびしき
 たちとちやう
 のひつうな
 みあつた
 りとちやう
 ちとせじろや
 やうやうな
 ひつうな
 とひつうな
 きびしき
 たちとちやう
 のひつうな
 みあつた

三

秋作あきさくが飛と婆ばへ
遙とほ小こ後ごの巻まきの

[illegible]

七草四郎

苦菜姬

志如心譚

四十五編
四十六編
四十七編
柳亭種彥作
惠齋芳幾畫

わが
のみ
ハ
犬
傳

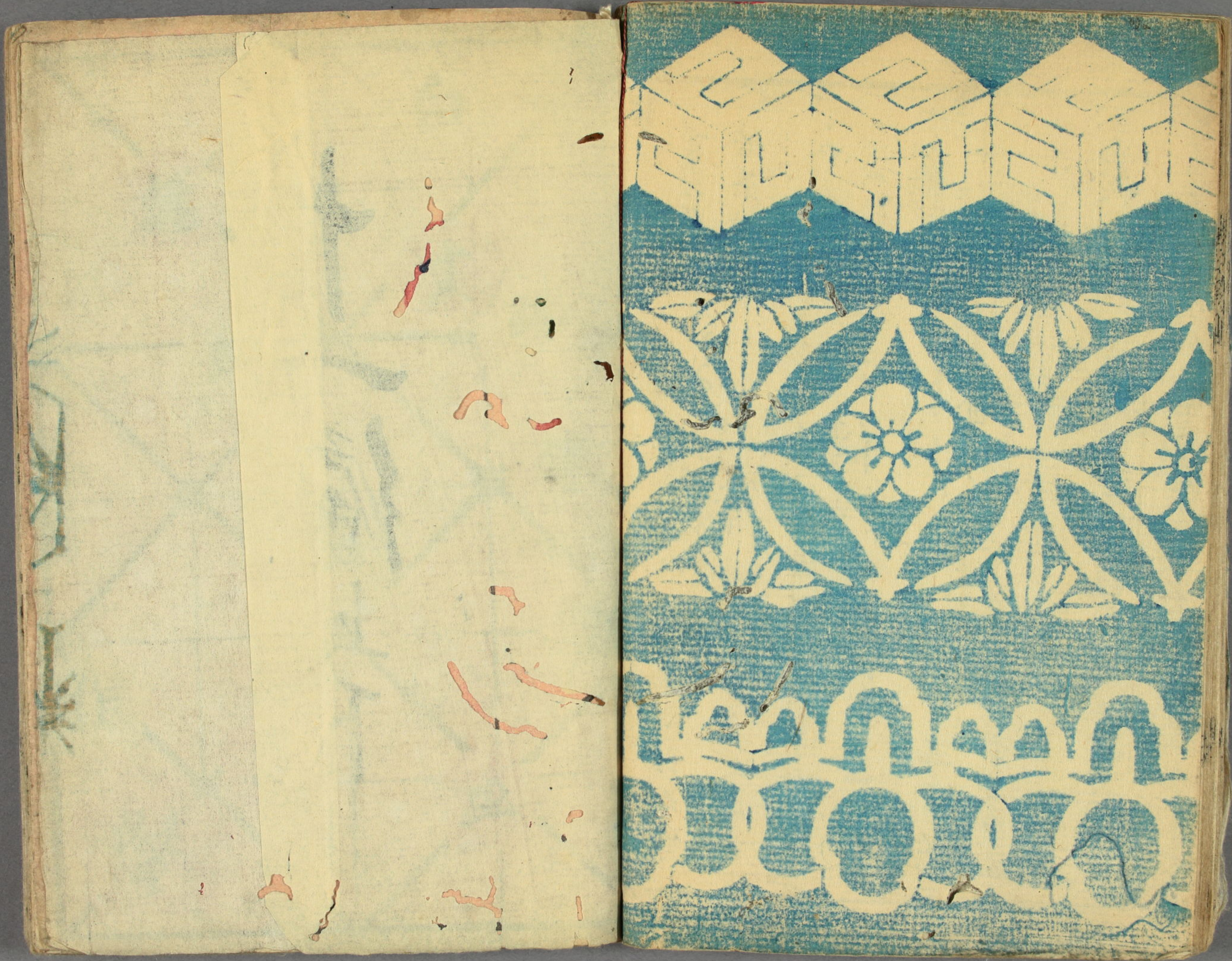
廿八編
廿九編
三十編
假名垣魯文錄
朝霞樓芳樂画

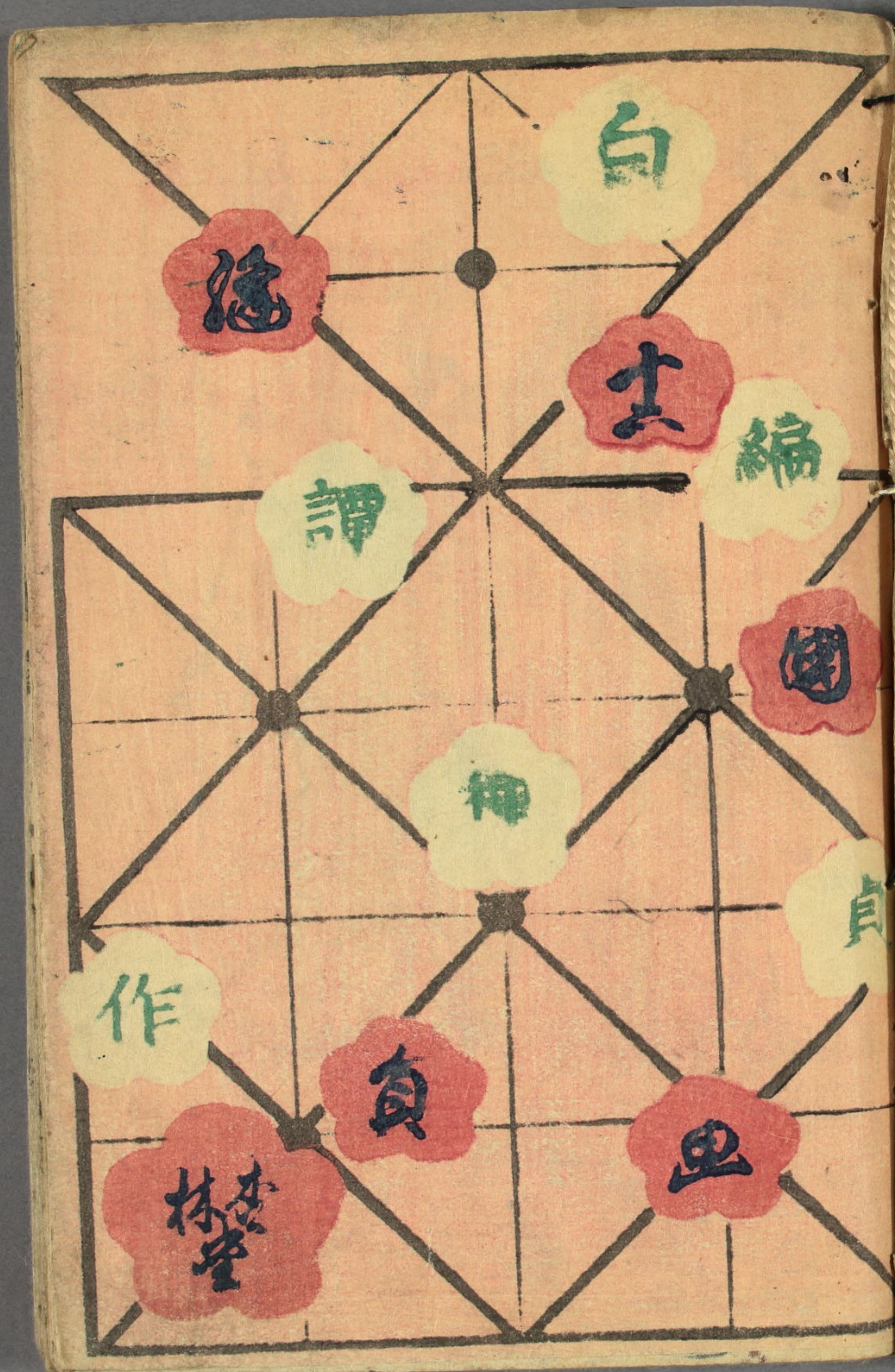
柳春秋色櫻近刻

山亭有人作
惠齋芳幾畫

二君の仕へぬ
忠臣の功
賢女の鏡

地本草紙問屋深川佐賀町廣岡屋幸助版





十一編上下

種員作

國貞車

譚

縫



下編二十

白



十二編上

外題西國圖

柳下亭種員作

下冊

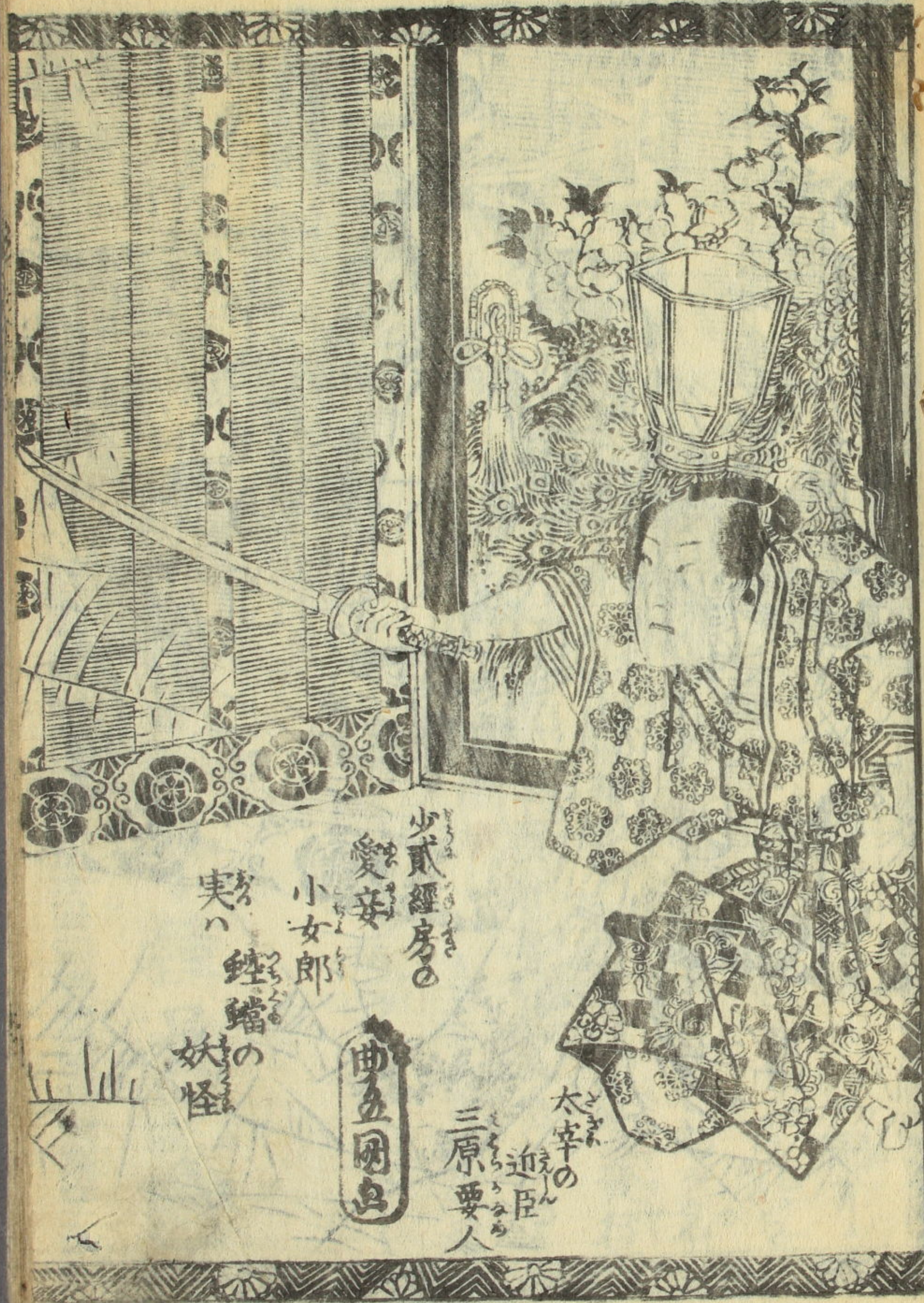
白縫譚 第二編

棋盤樓園自画



近松門左衛門が生涯に數種著したる淨瑠璃の中抜群く新奇の
一種曾我會社白山と題号へ建久四年五月廿八日の明七を初段と
鏝倉の柳營より政子御前が御持の獲物を御覽あるといひ
身序祐成と時致が烈敵工藤の持家へ思ひて本望を達する場が夜
終るまで大切なり十二段と十二時の昼夜の間は仕組入寅の上刻を
發端とあり丑の下刻に全く終趣向あり一が一部の工夫加之集林
子近松が筆頭よりこれに數遍の標返し讀み倦る例の妙作
彼兄弟が報讐の十八年よりこのころのころの件院本や假
借りと積年腹匠く當歳漸此冊子の十編より十五篇
つゞけやうやと昼夜のつゞ綴あり巻中の文より時刻

二二二



あらぬい十二



由多の園

又いん初意ありし拙筆に説くぬま十四編の舒詞り
 微細記々令童達の感讀くまぬ一助とをたゞさるる
 此序を誌みかゝびて再度かりへ八編に鷺津六郎七郎が名
 残の爲に老母が許し立寄條に十郎五郎が裾野の狩場へ發行
 とて中村を出る更と引用し不面暗合それ富岳の
 雪の色白縫の佳評もあつて弥高く江湖上もこえ曾我殿原
 が小袖の模様衛や蝶みしとて翼を生く飛ぶか
 四方に售を混空に度幾而已

嘉永壬子應鍾結稿
 同 癸丑上春發販

柳下亭種員記

此画の支ハ
十二編ハ六
巻説ハ廿九

正正八月十五日
のなぬくく
たけをこの廻
思ふ水の中
まふとあせむ
一七日のあひ
なふあふ

七郎

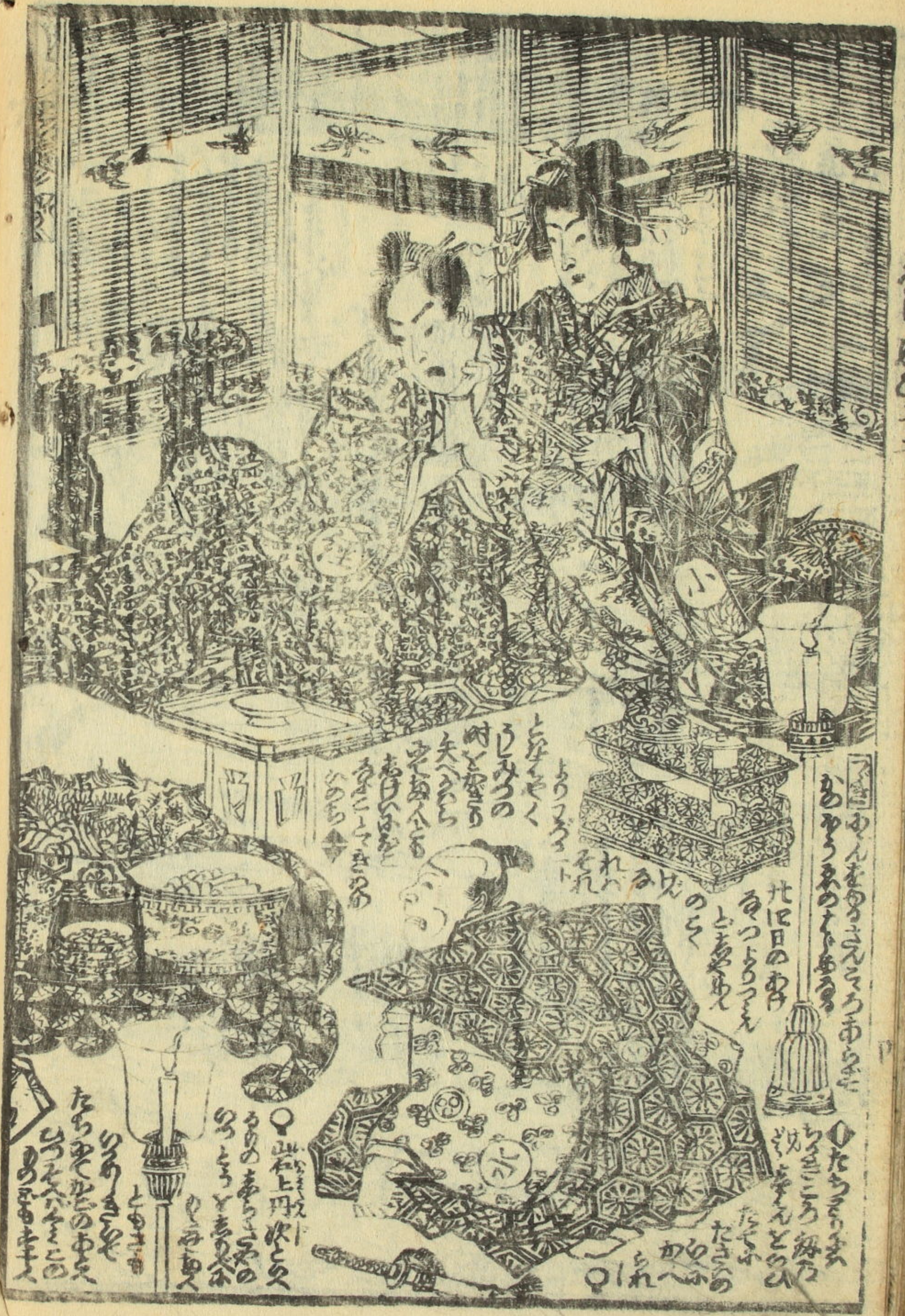
わびあひま
ふたつあひま
ふたつあひま
ふたつあひま
ふたつあひま
ふたつあひま
ふたつあひま
ふたつあひま
ふたつあひま
ふたつあひま

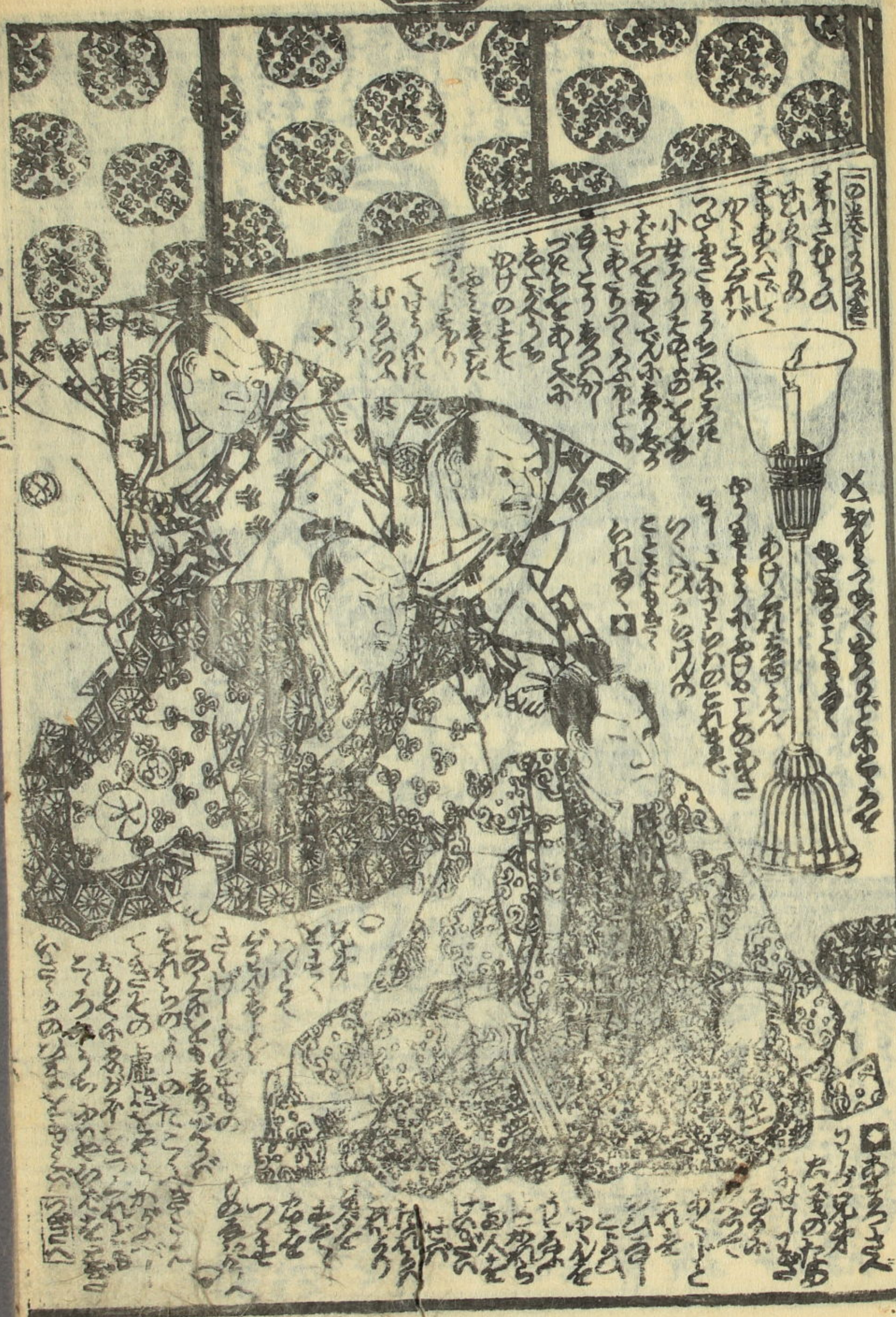
[illegible]

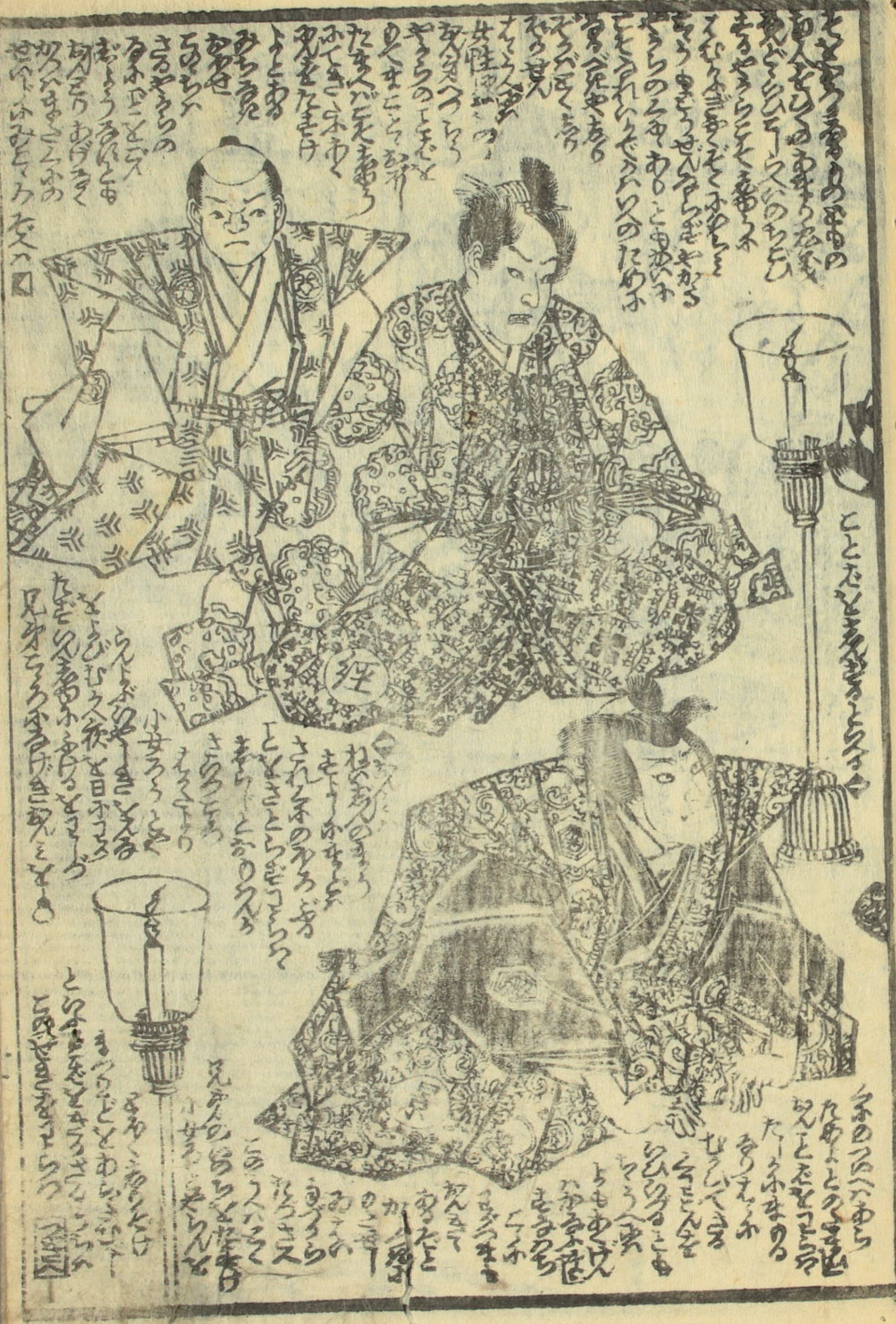
千太郎とていふ
あたらしくいふと
やうなうらむちで
そこのをまた
さういふつ
め、あやう
めどうとも
たはし日ごと
あつたなき
のわかれ
いとくみか
もせうふ
きんぬのか
るいあきや
くがきふ
あられ
おれえ
あきらをそ
といふから
とち
あき
あぐり
あぐり
さるあ
さるあそれらの
ゆへうちつ
つづい中が
ひるに
いとふく
のち

大郎
網無物

津







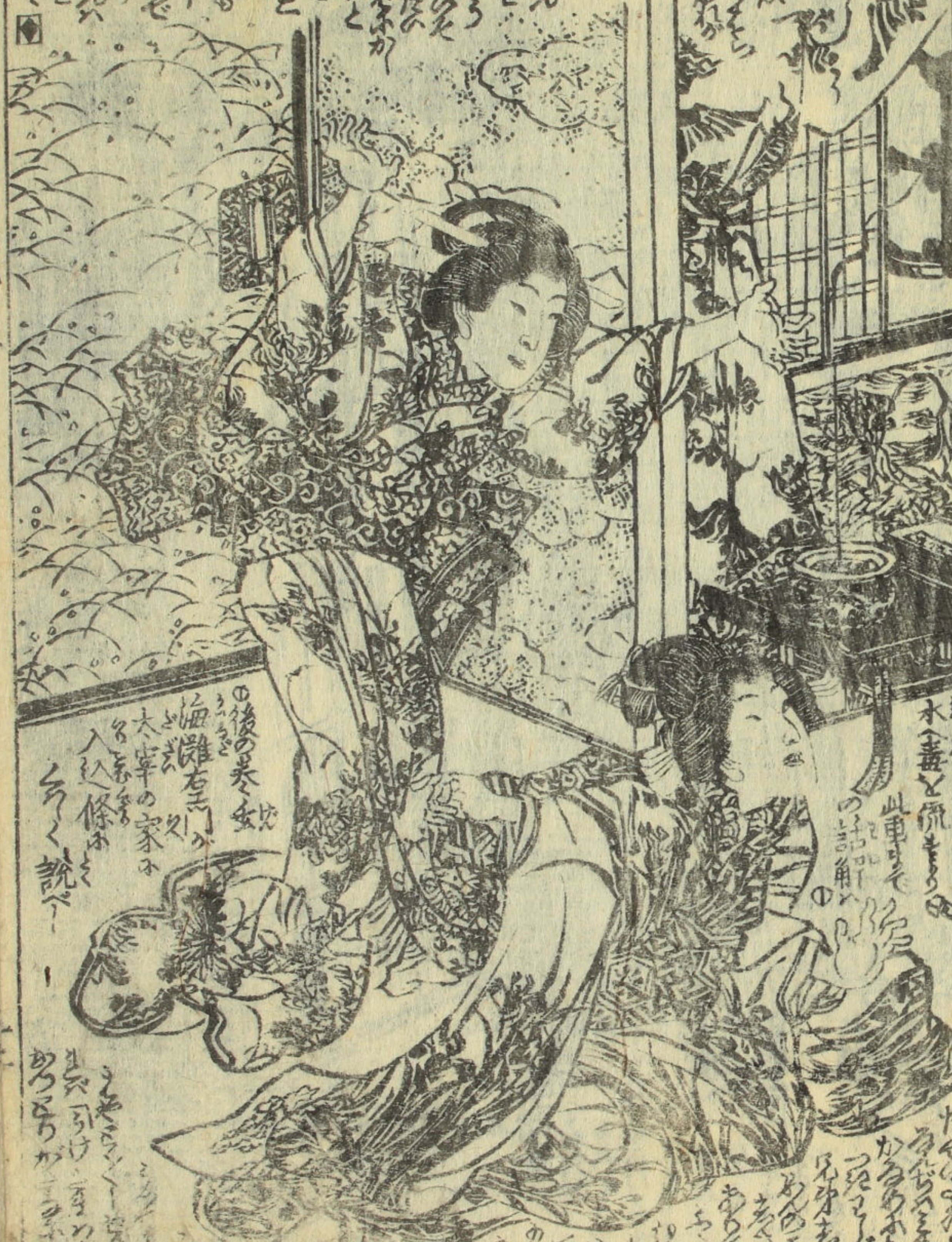
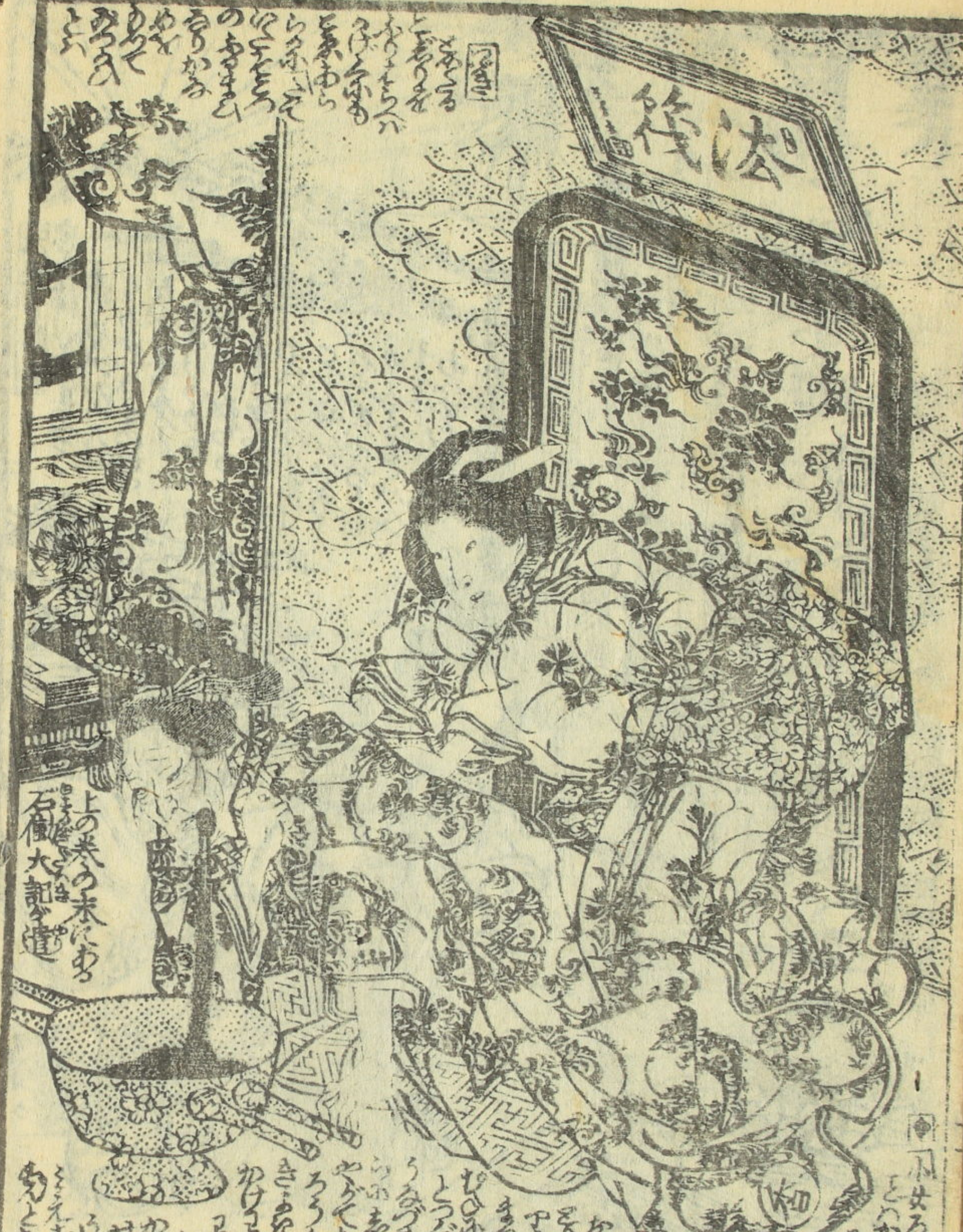
香壽院
北の殿へ
なりゆく
てまゐ



ぬかちんをあらたせんと
 シテ、あむひのみつひみたる
 まさせなれり。のをりと
 たづねてふこころ、あや
 りあはれみえらるゝめと
 わてそくかへしをせよ
 とまふだいきなり。えん
 あこののふとれとさう
 ぞれさむらひみえたり
 みえらるゝめとさう
 おはれとぞきえんの
 やり。ふもとをかへ
 たゆこころ、あやの
 せよとろく。つと
 七つのお人ごや
 ゆえあるべし
 えつとい
 夫々から
 りてかれ
 よつて



どうも
 よりの
 いさぐ
 るのあ
 るまづ
 るまづ
 のひりみ
 らぬわが
 きん
 へうち
 はたき
 ていふ
 日このえ
 のりかを
 まくとも
 ろりごつ
 なれよと
 日かてま
 とはめと
 うらな
 あまのこ
 くとその
 はまにあ
 てきし
 ていふ
 けりとう
 書かん
 あまを
 みえそ

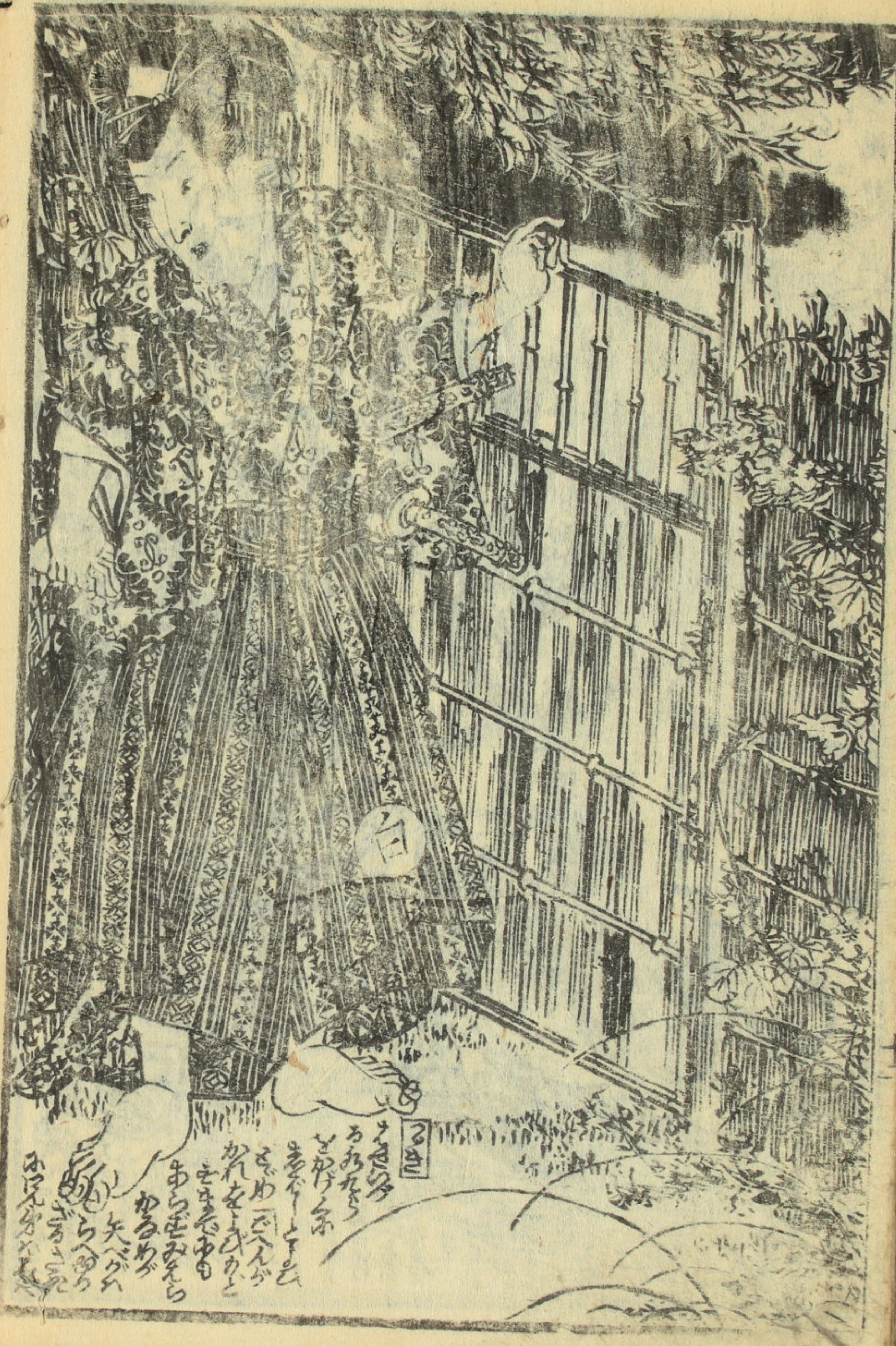
[illegible][illegible]

下女ふりやわいふ
このかたふらふら
ふうちふらふら
さうさふらふら
てあんふらふら
よこのふらふら
いふふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
あそふふらふら
かたはのふらふら
さうさふらふら
てあんふらふら
まうふらふら
ひふらふら
とふらふら
うなづきふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら
ふらふらふら



りやれみろ
ろやせうれつ々
さきとちうふ
ひびくあきん
なぐせむし
ありさあま
あらうら
もあふふ
つるそと
ゆうれべ△

ありさあま
あらうら
もあふふ
つるそと
ゆうれべ△
ありさあま
あらうら
もあふふ
つるそと
ゆうれべ△

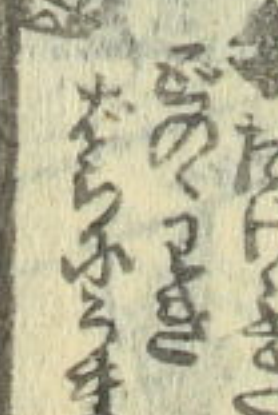
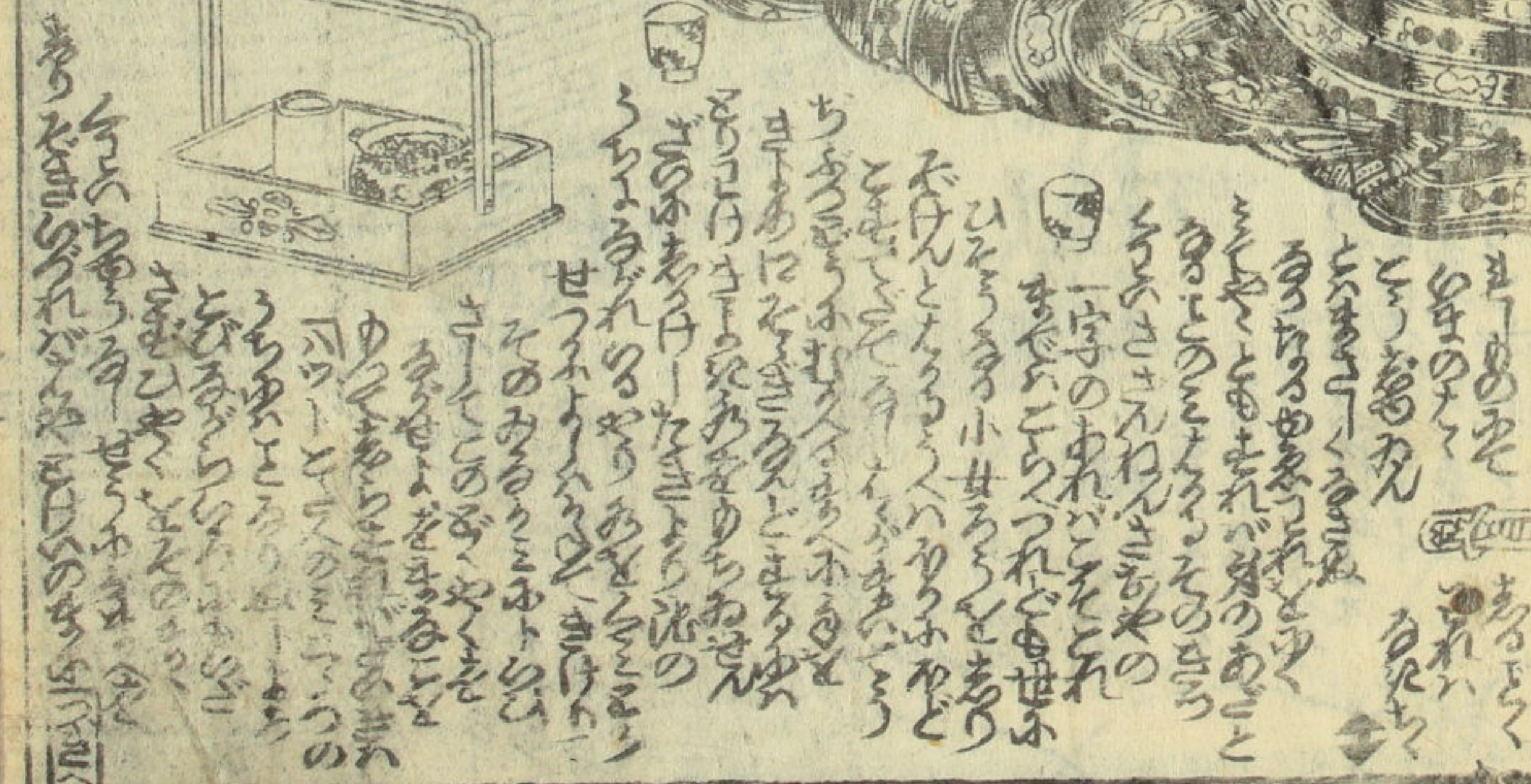


三
 多
 ろろろ
 とらふ
 まるゝと云
 らぬと云んか
 まるゝと云
 あらむをら
 かむが
 矢べが
 らあ
 らあ
 ぶんぶん

かゝる
それと
さういふ
それと
あつた
まゐり
はらへ
なり
かう
いふ
八
と
欠
あ

けづるふよりこそあつ
 きをれとかなとらせわれら
 むんをまてぐとまふあふひて
 なまうさるはてのちひス
 のあることやまのこゝろと
 ぢまゐてゐるもせざりしあふぢ
 とまふちちあ

[illegible][illegible]

[illegible]

[illegible][illegible]



種員作國貞画



三十一編 阿修羅 若菜姫の徳を非を改めし 終ふ命を預す此時果
 阿修羅 別れ 男子と名を合悲喜交涙を催す 話あり花形の鏡の由
 若菜姫 忠死且菊地自行淫婦 鮮も惑溺 春之助 軒計淫瀆屋敷の執
 見小 三十七編 春之助 英浦と二日市湯治場の昔語安養法師より
 豊後を追ふ折から若菜姫博多未精 貞行の夜
 小僧 珍 薄命の愁歎場三笠山大蛇川再たの取合 三十九編 三笠山
 黒崎の城より毛刺と初めの出會花 勇を専ら 或ハ
 白梅堂小随 果 又綾機父仇を復す 幸此編 載て 四十編
 三笠山 鹿夫婦が 大蛇川 師を山田河内 殺す 若菜姫九州を振入
 小至る 龜谷多門 鳥山秋作 松と再會 島山 向 四十編以下 父 記
 板元菊壽堂小代 校者柳亭種彦述

